

時代までは大分差異の姿の岩木山であったのだろう。

農する私等には敗戦数年後までラジオも新聞もなく、天候を予想するに岩木山にかかる雲の具合によって判断する。

明日の重要な仕事の際は夕方には自然と田ん圃の帰り道には岩木山に晴をお願いしたり、雨をお願いするのである。

古代から今日まで津軽人には一番の美しき岩木山、一番のありがたい自然の岩木山を眺望されたのは大和後期の人々かもしれない、戦時中は訓練する陣地を岩木山麓、山田野に構築、晴れた日は毎日のように砲の撃つ響きが我がふるさとにも届いたのは、支那事変（昭和十二年）前後からのことである。

今は冬期間には鯨ヶ沢スキー場の燦然とした照明が我がふるさとから輝いて見える。開発は人の知能による、岩木山の変貌がある。岩木山には永遠にこのままでの美しさでいてくれることをお祈りする。頂上から下山すると始めの鳥居でわらじを脱ぎ捨て霊域から俗界に戻ることになる。

下山の際、手折った這松の枝をふりかざし、顔にひよっとこや、お多福の面コを付けて、笛・太鼓のはやしで神社境内で『いい山かげだ、ついだち山かげだ、バタラ、バタラ、バタラよ』とはね踊る。

岩木山神社のお守り、岩木山を主題にした絵の手拭、まめしぼりの手拭、子供用面コ、桃太郎・青オニ・金時・乃木大将のらくろ（マンガ本犬の軍隊の主人公）お姫さま、ひよっとこ・お多福、多彩のおみやげが出店に並んでいる。

日頃お世話になっている人々へのおみやげの品定めに雑踏の人となる。

昭和三十年頃、私の弟が仲間同志、秋元春師、土岐繁行、土岐安政、黒川重春、鎌田梅男・千代梅、浜田俊蔵、他十名程が嘉瀬八幡宮前の小田川で水垢離をとり、三日間は「サイギサイギ……」の唱文をとなえて、故鎌田稲辰一派の笛、鼓のはやしで八幡さまに宿って魚・肉を絶って昼夜数回齋戒沐浴する。四日目から白装束をつけ三メートル五メートルもある大御幣をかざし、登山ばやしの音に近村の氏神参りや、他村親類で酒肴と菓子等を庭先で御馳走になったといわれている。最終日嘉瀬村内を回る、岩木山初詣の人は赤・青、二回目から白、五回目銀、七回目から金色を御幣に印し、ハチ巻頭に白装束、五メートルもある大御幣の竿元を腹巻袋に押し込み。高く掲げ、笛・太鼓の登山ばやしに掛け声勇ましく練り歩く。

村人の出されたお酒に酔ばらって疲れ、御幣を軒先に立掛け一休みして見張りを怠るとタチマチ、テープは子供等に抜き取られてしまう。秋の訪れを告げる勇壮な風物詩であった。岩木山参詣のサイギ、サイギの掛声も弟と仲間が最後で嘉瀬より絶える。

西郡稲垣村繁田部落の岩木川土手下に津軽赤倉神社。昭和四十三年落成の立派な拝殿と平成六年には開祖宮司修行五十周年記念の石ノ御神燈・木ノ献燈・石ノ唐獅子等が、所狭しと建立されている。

チしていた。

とくに樹齢千年といわれる二本の杉老木は高さ四十一メートルを越え、巨大さは県内随一でこれに勝るものないといわれる。

揭示版の由緒には、延暦十五年（七九六）岩木山北麓に巖鬼山西方寺観院が建立されたことに始まり、坂上ノ田村磨の蝦夷平定祈願のため再建と伝えられる、又文安五年（一四四八）社殿が野火により焼失し長旦氏によって再建。その後、津軽藩祖為信が修復したが慶長九年（一六〇四）には弟子信建が「津軽総領之宮内」大輔藤原臣銘の鰐口（県重宝）を奉納したと記されている。

やがて、百澤寺ら併合されたが神社は元禄四年（一六九一）に氏子によって再興され明治六年（一八七三）巖鬼山神社と改称した。

巖鬼山を去り約十キロメートル程走り大石神社に着く海拔約六百メートルあるといわれるこの神社境内から北の遙か彼方には中山山脈が連なり、その先端に小泊権現崎岬、津軽平野には我がふる里金木町もかすかに見られる。

眼下には鶴田町と富士見湖の風景あり、境内で板柳町の一行が十五人程で酒盛をしていた。御手水の竜の口より出る冷水を呑み昼食している七十二歳の山菜採り籠の人が境内の海拔と神社の祭りごとを教えてくれた。この人の若い頃には幾日もの祭りが続いたといわれる。境内に相撲の土俵のあったという一角を指で示し、祭りの奉納相撲に参加すると力（能力も含む）が

これらの奉献者の人名は岩手県が多く信仰者の繁栄と広さを物語っている。明治生れ嘉瀬T氏は岩木山山頂に十数回参詣したベテランで、嘉瀬参詣集団の先達を常につとめ、登りは北側、下降には南側の百沢を下り岩木山神社を参詣したという。何故ならば、岩木山は縄文期より日本海交通によって北側より発展、宝亀二年岩木山山頂に日祇宮建立・巖鬼山神社・大石神社ともども神祇「天ノ神、地ノ神」として崇めた聖地である。

津軽為信の時代に入って継続的転変地異、大災害が起き北側の神社仏閣は壊滅的打撃を受け、その後は南側の岩木山神社等が発展してきたといわれる。又森田村（元陸軍八師団の演習地）には現認できる製鉄とタタラ遺跡が点々と存在しているのは、岩木山西北丘陵地は燃料の赤松と原料となる七里長浜の砂鉄と湖沼の水が共に豊富で製鉄の三要素が揃っており、初期農耕器具始め、弥生時代へ平安時代にかけての十三湊の渡海用・巨船（木造船）の船金具に活用したと言われている。

T氏は古代の夢を追い、又赤倉山の信仰も深くもあり先達をつとめて北側を登るのだといわれる。T氏が故人となった後、その妻も赤倉山信仰を続け津軽赤倉山神社の竜神さまと、連枝となり、多くの人助けをされ、毎日信者が数多く訪れた。

弘前市十腰内にある巖鬼山神社は岩木山神社の元宮であり、昔は観音院と称し、本尊は十一面観音で、現在も津軽の三十三観音の五番の礼所で参詣の人が絶えない。何百年の古木の蒼然とした境内には竜神様の祠もあり、又本殿の青錆の屋根ともマッ



授り、女の人が御手水の冷水を呑み相撲を見物すると良い子宝に恵まれるといわれ、赤倉山の神さまの伝説は多く、本尊は赤倉山大権現でこの神様は大和族とはまつらざる津軽の先住民ともいわれる鬼神様とも赤倉様とも亦大人とも呼ばれていて昔はキコリや山菜採りが山道で大人と仲よくなり、時々相撲などをとって遊び、何もとらないで手ぶらで帰ることがあっても、その夜のうちに、自分の裏庭にタキギが山のようにあったり、山菜も食い切れぬ程に積まれておったという。

麓の村人が赤倉山の大人と一緒に遊んで悪意になると夏季に入り湧水して田畑の水不足になると、大人に相談をもちかけ水引の方法を教えてもらうなど一風変わった神様であって、相撲の好きな大人「赤倉様・鬼神様」であるので奉納相撲は盛大であったといわれる。

大石神社の境内は隈なく馬子舎を模した蒼前神の祠が満ちており、神社の奥の院とも思われる場所にこの社の御神体ともいべき四メートル四方ほどの巨石があり、この神石を拝し、馬小舎の蒼前神を拝して巡ると馬のような精力が宿り、何事にも力が生じると語ってくれ、山菜採りは深い緑の中に姿を消して行く。

「神社縁起・慶長十七年津軽二代藩主津軽越中守信牧公勸請と申してある」

境内に赤倉霊場案内略図板が掲示されていた。

大石境内ぬけて少し登ると赤倉境内に入り、右の赤倉霊場略

の中つ国の境にいたので境界の神である道祖神の意味ももつ」古事記に現れている神様の像、又大小の幾多の石像が建立されている。

この（天狗のような高い鼻の神様）猿田彦命に道案内の先達を勤めさせ大和族がみちの奥である。この聖地の信仰も亦現在ののような信仰に変わったのであろう。太古―縄文―弥生―津軽の祖先はこの聖地でどのような信仰をされたのだろう。嘉瀬のT氏が山頂の参拝に先達を勤め北側の大石登山道を行くのにこだわったのも解る気がした。

赤倉山神社を去り南側の岩木神社に至り、神社前の駐車場の広場に高さ六メートルもある津軽民謡碑・昭和四十六年建立とある。碑には、嘉瀬の桃太郎を筆頭に県下民謡大家嘉瀬の鎌田稲一（吉幾三の父）本町の津島辰五郎・嘉瀬奴踊りとその他の唄い手と共に連名されている。金木町の誇りである。

### 岩木山神社―由緒沿革

世々地頭、領主何れもがよく崇敬の赤誠をつくし、江戸時代には津軽藩主為信・信牧・信政により大造営が行なわれ、近代には崇敬者の熱意を集めて建造物・諸施設とも整い、名実ともにその偉容を誇り、畏き辺りも日本の北門鎮護の名社として農業漁業、商工業医薬、交通関係、とりわけ開運、福の神として色々の宗派を越え、深い信仰の源として厚く崇敬されておりま

図掲示板の礼拝堂又祭り時の宿舍兼、行者又療養者の宿舍と思われる建物が次々と現われる。まばらではあるが宿舍の窓が開き人影も見受けられた。

海抜の高いためか日本海の北風のせいか大木は見当たらない、雑木林の蒼葉に日照が映え、谷川の浅瀬の音、河鹿（蛙）の合唱につつまれながら狭くなる参道を登り行く。境内の最終点には平安時代の空海の弘法大師、赤倉山大権現（鬼様、赤倉様、大人とも称した）、岩木大神、此の聖地と信仰を広めてくれた女人像、又猿田彦命古事記に天照御神の命により高天の原の天上から葦原の中つ国の地上に爾々芸命が天降された時、途中より我が国に道案内されたといわれる地上に住む国つ神「神の田を守る太陽の使いの猿の意味もありここでは高天の原と葦原

### 赤倉霊場案内略図

- |           |          |
|-----------|----------|
| ①菊乃道神道教社  | ⑮稗市堂西山神社 |
| ②建石堂      | ⑯船水堂     |
| ③繁田むすび講社  | ⑰金木堂     |
| ④浪岡堂      | ⑱如来瀬堂    |
| ⑤鼻和堂赤倉山社  | ⑲山川堂     |
| ⑥赤倉山宝泉院   | ⑳住吉堂     |
| ⑦十腰内堂     | ㉑白沢堂     |
| ⑧         | ㉒長内タヨ院   |
| ⑨相馬堂      | ㉓矢沢堂     |
| ⑩赤倉山金銀寺   | ㉔休       |
| ⑪福山堂      | ㉕田舎館堂赤倉所 |
| ⑫本誠堂      | ㉖        |
| ⑬出雲大社弘前支教 | ㉗        |
| ⑭五所川原堂    | ㉘扶桑敷会行堂  |

(○の数字はお堂のだけ)

新しき時代に向い、ご神徳のまにまに日本人の心の絆としてひとしく拝しご神威ますます輝かしく仰ぎ奉られるのであります。(平成十二年六月)



防護柵工事一式

有限会社 須崎建設

代表取締役 須崎悠悦

金木町大字嘉瀬字端山崎202番 TEL 0173(52)3571 FAX 0173(52)2303



## ブ ン (癩病)

### 福部庵 比佐伍

半世紀も前のことである。

嘉瀬には血統の悪い「まき」族があると言われ、他町村からの嫁、婿が少なく、部落内での婚姻が多かった。

人を見て話をしなければ、親戚はクモの巣の如く入り交り、悪口でも言えばすぐ相手に聞える。

また、親類の多い者は、馬鹿でもチョンでも選挙には当選すると言われていた。

近親結婚は、時には優秀な子が産れる反面、智能の遅れたのが育つ割合も少なくないなどとも言えられたものだ。

医学的にはどんなものが知らないが、わが国の民法で直系血族間、三親等内の傍系血族および直系姻族間の婚姻を禁じているところを見れば良い方より悪い結果の方が多いのかも知れない。

「血統の悪いまき(族)」とは、その一族から「ドシ」と言わ

てカタワ(不具者)になったり、面ア見れば鼻かけたりしたら御先祖様サ申し訳アネベさア……」

「ソニヤ、ソニヤ、貰った婿の血統調べねで、良い男だし、働くしと思っていだら、産れだ孫ア年頃になったけア、鼻欠けるね、面変形してくるね……まるで化けものみたいになつて、他人さ姿見せられねネ……奥の部屋さ、閉とじこめて置くしかねば……まあまあ、ヤヅエッタもんだなア……」

癩病は不治の病とされていたから、人前には出さない、隔離するのが伝染しない唯一の方法だと思っていたようだ。

筆者が知っている人では、小学校を出て四〇五年自家の農業を手伝っていて、村の虫祭りの若者頭候補と言われていた頃に発病し、生家は自作農で村でも裕福な方に指折られる家だから世間体を考えての事か、座敷牢の中に入れ、人を一步一步も近づけないまま若い命を消えさせてしまった。

もう一人の方は、これも中農で自作地借入地合せて三町歩(三ヘクタール)余りの耕作をする農業経営者で、借子と常庸を置くほどの田畑を耕していたが、若い頃に病を知り、新城村(現 青森市)松ヶ丘保養所で療養し、五十歳代で退所して農業に従事、堰頭を務めるなど健康を回復、八十歳過ぎまで生じた。

嘉瀬の部落に血筋の悪い一族のあったのは、こんな説もある。

加瀬(嘉瀬)は昔闘い(戦?政治?)に敗れた落人が住み、他部落との交流を嫌い、その一族だけで子孫を遺してきたため

れる難病人が出たことを言うのである。

皮膚が腐り、髪の毛が脱け、指が変形、面体が醜くなる病気で、癩病という。

嘉瀬地区にはそういう病人の出た家が何軒かあったようであるが、その病気におかされているのは、何も嘉瀬の人だけではなく全国、いや全世界にあるのだ。

不治の病といわれた癩病が出た族は、そのことをひたかくしに隠す。世間の人々はこの病気は遺伝するものだと思っているからである。

そういう家には美男、美女が多いので、いくらキレイな娘でもあのマキ(族)からは嫁に貰わない。例えば若い男女が恋愛におち入っても、生木をさくごとく関係を切り離してしまうのである。

「あそこの家はドシマキだ。——産まれる孫ア、手足腐つ

どうしても近親結婚となり、そういう一族からドシ(レプラ)が出ているのだという。

隣部落の忌良市(喜良市)の山奥に湯の沢という冷泉の湧くところにも貴人が住んでいて人を近づけぬという伝説があるが、これとの関連は未知である。

『癩は一八七三年(明治六)、ノルウェー人ハンセンが発見した病原菌により伝染病でハンセン病とよばれる。乳幼児期に感染しやすいが伝染力が弱く、発病するのはその中の少数。発病年齢は思春期前後が多い。病型は病原菌繁殖が優勢な癩腫型と身体抵抗力が比較的強い類結核型とに大別。病巣は皮膚と神経に好発。症状は主に四肢、顔面の知覚麻痺、斑紋、結節、脱毛、神経肥厚、神経麻痺による変形など。さらに進むと失明、鼻梁陥没、喉頭浮腫を生じる。外傷を受けやすく、そのため変形が進むことが多い。一八九四年アメリカのカーピル療養所でプロミン治療が偉効を奏し、その時から治療剤開発が急速に進展しハンセン病が治療する時代を迎えた。不治の伝染病として恐れ患者の隔離収容を唯一の予防手段と思っていた時代、日本では一九〇九年(明治四二)全国に初めて設けられた五カ所の療養所の一つ。現在入園者は五〇〇人、大部分は後遺症をもつ高齢者。一九七八年(昭和五三)全国の患者数は約九千九

〇〇人。ほとんど治癒に近く後遺症のある高齢者。流行期の新発生は八〇〇人前後の年もあったが、最近急激に減少



し、一九七八年は六一人（うち沖繩四二人）。『青森県百科事典。荒川巖』

いまはそんな病気があることも忘れられるようになって、現代の若い人たちに「ドン」と言っても何の事かわからないだろう。

医学の進歩は不治の病と言われた病気も治療できるようになり患者数は年々減少していると言う。

ちなみに、松ヶ丘保養園には現在二五〇人（東北、北海道出身者）が後遺症のリハビリなど療養に励んでいるとの事。かつて患者の家族、縁者が肩身をせまくして生活していたのは昔の物語りとなった。

しかし、医学がいくら進んでも又新しい病原菌・ウイルスが出てくるなど、人類と病気との闘いに終りはない。

### 補 足 （平成八年一月二十二日東奥日報記事から）

四十年以上にわたり一般社会と療養施設を隔離する壁となってきた「らい予防法」が、厚生省の「感染力も弱く隔離は不要」との最終報告を受け、二十二日から始まる通常国会で廃止となる可能性が強まっている。

らい予防法 一九〇七年制定の「癩（らい）予防ニ関スル件」を数回にわたり見直し五三年に成立した。同法の対象であるハンセ病は、らい菌による慢性感染症で感覚まひなどを伴う。治療法がなかった時代には特殊な病気とされ、患

者の強制隔離などが規定された。しかし、化学療法が進歩で完治するようになったため、患者団体などから「隔離は不要」との声が強まり、厚生省の検討会も隔離措置などの廃止を提言、厚生省は近く同法の廃止を盛り込んだ法案を国会に提案する。

現在も約六千五百人の患者の大多数が、全国十五カ所の療養所で生活している。

津軽弁 村の笑い話

### 「協 力」

甲「いま、タケノコが最盛期なんだってね…」

乙「毎朝三時起きで採るに行っているよ。」

甲「そんなに大勢の人たちがタケノコ採りに行ったら、自然破壊じゃないの……」

乙「ナーニ、藪ができないように協力しているのさ……」

甲「それもそうだな。最近医療ミスが多くなったものナァ……」

（やぶ野 竹林）

## 半世紀前の回想

### 百姓の苦勞

数百年前から、百姓は想像を絶する過酷な重労働と貧しさに耐えてきたが、この難澁を寸分でも抜け切れないものかと胸中にありながら細々と生きてきたが、原始的農業から脱却される日は何時かと何時も脳裏にあったが、戦後まもなく農家の季節作業に應じた、各種の農業機械が見える様になったが、農業機械は百姓の革命的な（今までの農業を根本から変えた）存在であると思うが、過酷な重労働からの解放でもあり「救いの神」でもあると思うが、機械を入手するには高額のコストが必要で手が届かなかったが、戦後は出稼ぎが流行し生活の一助と農業機械を導入する為に妻子と別れ出稼ぎに行くが、戦前までの百姓の過酷な重労働を知らない一部の人は農家を軽視し、機械化貧乏とか、生活が貧しいから、出稼ぎかと蔭口を言っておった

## 秋 元 惣之進

が、今は大、中、小農に拘らず殆んどの農家は出稼ぎで得たお金で生活の一助と農業機械を導入されて、過酷な重労働から解放された、出稼ぎは県の三次産業であると思う。

又、国際化で国と国との交易もあると思うが、外国から「米」を輸入し「米」が余ったと毎年毎年米価の値下げ、減反の強化、これでは農民の「首」に縄を絞めつけて「半生、半死」の浮目に合わせている様に感じるがまったく矛盾していると思う。

数年前に「ウルグアイランド」で「米」の完全自由化が決められたが、外国からの輸入量は今の所は「ミニマムアクセス」最小限度の輸入量だが、これからは「米」の完全自由化で外国から安い「米」が大量に輸入されると思う。

農業は今までの様に高価な機械を導入するのは考え物であると思う。又、人口の減少で農業後継者が出ないと思うのは若い人々は百姓を嫌い都市に憧れ流出し、又、勤人に憧れている



傾向の様だが、百姓は経済的に恵まれていないのは、年金制度を見ても分かると思う。又、農家に嫁の来手が薄く若い人々は百姓を嫌っているのを見ても一目瞭然である。

これからは高価な農業機械を導入するのは考え物であると思ふが、百姓の大昔からの原始的過酷な重労働の姿と現在の機械化農業の姿を露骨だが赤裸々に綴ってみた。

昔は雪が消えるとすぐに苗代準備に入ったが薄氷が張っている冷たい苗代の中に入り、鍬で一鍬、一鍬ずつ土を掘り起こし、苗代掻きをしたが、薄氷が張ってある苗代の水の中に素足で入り（昔はゴム長靴がなかった）素手、素足で手足は冷たさで真赤になり泣く程に痛みを覚えるが我慢して苗代の準備に取り掛かった。

戦後は苗代打ち、苗代掻きも「トラクター」に乗って耕起や苗代掻きをする様になった。

苗代の播種も作業場で行なわれる様になり、順を追うと機械が苗代用の「オリタ」に砕土が敷かれてその上に種籾が播かれて種籾の上に覆土されて一台の機械で一挙に出来る様になった。

田圃に肥料を施肥するのに、昔は小さな籠に肥料を入れてこの小さな手で肥料を播いたが一日に幾等も播けなかったが、肥料散布機が出てからは肥料散布機を「トラクター」に取り付け

黒土田、サルケ土田とあの広い田圃を三本鍬で一鍬、一鍬ずつ田打や田掻きをしたが、手には「水疱瘡Ⅱマメ」と汗を流して黙々と田打したと言うが今では考えられない苦労の連続であったと思う。あの広い田圃を三本鍬で耕起したので「赤土田」や「黒土田」よりも「サルケ土田」の方が三本鍬で打ちやすく捗るので売買しても値段が高かったと言う。

それから数十年後には三本鍬で田打をするよりも数十倍も「ハカドルⅡ能率」金鍬（鉄）が入り、馬のある家では大抵の農家では使用したが馬鍬だけは昔のままだった。

その数十年後の戦後、まもなく耕運機や「トラクター」が入り能率は数十倍も上がる様になった。

農家は次から次と仕事が続っており、田打や田掻きが終わるとすぐ田植である。田植も女の人達が早朝から起きて冷たい泥水の中を素手で田圃に入り、腰を太陽に向け重い苗籠を腰に下げ一株、一株ずつ田植をしたが田植機が出てから農家の女達は腰を曲げて田植する事がなく重労働から開放された。

今は乗用田植機で殆んどの人が田植機に乗ったままで田植をしている。

田植えが終わったと思ったら今度はすぐに田の草取（除草）であるが田の草取りは腰が折れる程に痛く、真夏の最中であるから汗がだらだらと体中に流れ、夕暮頃になると夜蚊が集団で襲

て乗りながら田圃が一ヶ所にあると数町歩も播く様になった。

嘉瀬は昔から田圃の水が不足だったので「シドロ田」と言う水田が其処ここに見られた「シドロ田」と言うのは、水が不足だったので冬の積った雪が春に解け出した雪の水を水田一杯に入れておいて、田打時になると冷たい水が入っている田圃に素足、素手（長靴、手袋がなかった）で一鍬、一鍬ずつ田圃を打ち起こして耕起した。普通耕起している「シドロ田」の田圃の面積はその家にも依るが三反〓五反位であったが、あの広い三反〓五反位の「シドロ田」を一鍬、一鍬ずつ打ち起こした冷たい風が吹く春先でも肌着一枚「頭には振り鉢巻き」をして汗を流して手には「マメⅡ水疱瘡」が出来て今では考えられない重労働であった。

又、嘉瀬は昔から水田の水が不足な為に所々に掘抜き井戸があり井戸掘りに井戸を掘って貰い、水田の水補給に役立てたが一般の水田を耕作している農家も毎晩の様に夜水を引いて苦勞した（今は「ダム」が出来て夜水を引く事は減多に見られなくなった。）

嘉瀬の水田は、約六百余町歩あると言うが水田の土壌は一般的に赤土田（赤粘土）と黒土田（赤粘土と黒土の混っている土壌）と「サルケ土田Ⅱ泥炭程度の低い土」と大体三層の土質に分けられているが、大昔は金（鉄）鋤がなかったので赤土田、

来して顔や「股引き」の割水目から入り刺したので痛く痒く手で叩くと顔や「股引き」に泥が付くので閉口した。

戦後、除草剤が入りあの苦勞した田の草取りは開放された。

小さな鎌であの長い「クロⅡ畦畔」を腰を曲げて「クロ草」を刈るが、腰が痛く疲れて汗を流して腰を伸ばし伸ばしして「クロ草」を刈ったがそれも春から秋までに三回位も刈ったが、今思うと良くもやった物だどつくづく感じたが戦後、まもなく草刈機が出て草刈機で刈っておったが近年は自動歩行（ウィンゲモア）草刈機が開発されて「クロ草Ⅱ畦畔」も田圃が一ヶ所にあると数町歩も刈る様になった。

大昔は「センコキⅡ脱粒機」で稲を脱穀したと言う「センコキ」は薄い鉄の細い板状で造られ、数十本の細い鉄の板先の尖った所に稲束を入れて稲束を引っ張ると稲の籾が落ちたと言う。私も子供の頃に見た記憶がある。

それから数十年後に足踏みの脱穀機が入って来たが、私が学校時代の頃に私の家でも早速、足踏みの脱穀機を買ったが、面白半分の手伝いをした記憶がある。当時の農家の人は手や足に「ヒビⅡ靴」が出来て傷口からは血が「だらだら」出たが痛いのを我慢して働いたが、時代の移り変りで、戦後まもなく「コンバイン」が入り「コンバイン」は稲の刈り取りから脱穀まで一挙に田圃の中で終り一日に数反も稲の刈り取りから脱穀出来



る様になった。

この様に綴ると農家は機械の導入に依って農作業は能率が上がり、農家は暇を持て余しているのではないかと一般の人は思うかも知れないが、それは根本的な錯覚であると言うのは、農業だけでは生活困難であり、朝は夜が明ける頃に起きて田圃の水の掛引きや「クロ草取り」除草剤散布、その他の仕事を朝飯前に田圃の仕事を一通り済ませてから各自の仕事に出掛け、又、断腸の思いで妻子と別れて出稼ぎに出掛けるのが現在の農家の姿であると思う。

又、農家の老人には定年がないと言うが、全くその通りで老人は生活の一助にと歩けるうちは田圃や畑に手伝うのが現在の老人であると思う。

## 風化させるな米軍機金木空襲

終戦で軍隊から復員して来た私は嘉瀬村の町内の常会長をしている鎌田稲辰（故人）さんに復員の挨拶方々、一日中邪魔して遊んで来たが、その間に戦争の話やら東京空襲、青森空襲など話され、又、赤紙一枚で内外に出征し、親兄弟や妻子と生木を割る様に別れ、戦争や空襲で死傷者を出した家族は特に戦争の悲惨さを語り合っているうちに、鎌田さんは金木町に米軍

機が空襲に来た事を詳しく話してくれたが、あれから半世紀余り、五五年の歳月が流れたが、当時の金木空襲について聞いた話を綴ってみた。

昭和二十年七月の暑い日に鎌田さんは、県道沿いの金木通り嘉瀬の北の村外れ（現 畑中町内）に田圃があったので（現 榊建設宅地）田圃に出掛け仕事をしていると、突然、サイレンと警鐘が気味悪く鳴り出して数分後に空襲警報に切り替えられて仰天した。

鎌田さんは恐ろしさの余り田圃の堰の中に身体を隠し、頭部だけを出して金木方面を見ると米軍機が金木上空を底空で爆弾投下と機銃掃射を一齐に開始しているかに見えた。その数分後に金木駅前付近が火煙でもうもうと立ち登っておったので爆撃による火事だと直感的に思っておったら空襲警報はまもなく解除されたと言うが、鎌田さんは嘉瀬村の有志の一人でもあり、消防団の副分団長でもあり、町内の常会長並に村の肩書きを多く持っていた一人であった。

鎌田さんは家族を顧みず田圃から仕事着のまま金木爆弾投下の現場に駆けつけて行つて見たと言うが、あれから五五年、半世紀余り経過した今、聞き漏らした事も多々あると思い、ある日に土岐家を尋ねて見た。土岐惣之助宅の妻は金木駅前出身であり五五年前の金木空襲について聞いてみたが、少しは思い出せるが、私よりも当時金木（駅前）の「セイセイ薬局」の奥

さんは知っていると思うと言ったので、早速、奥さんを尋ねて五四年前の金木空襲について聞いて見たが、奥さんは薬局の多忙にもかかわらず嫌な顔もせずに親切に知らせてくれた。

昭和二十年七月十五日午前八時頃だった。突然、警戒警報の「サイレン」と半鐘が鳴り響き、すぐに空襲警報となり町民はびっくりした。全く無防備の田舎町金木まで米軍機が空襲にくるとは夢に思わなかった。平成十一年十一月三日「セイセイ薬局」を尋ねてお話を聞いた時に薬局の奥さんの「母親」は爆弾の破片で重傷、「妹」は爆弾の破片で「即死」され、今年（平成十一年）七月十五日が「命日」なので、お尚様と親類を呼んで供養して貰ったと言う。その外にも空襲について色々と言ってくれた。

私はこの外にも金木町の高齢者の方々の二三人を尋ねて金木空襲の事を聞くに歩いたが、語ってくれた人達の話をもとめて見ると昭和二十年七月十五日午前八時頃、警戒警報のサイレンと半鐘がケタタマシク鳴り、すぐに空襲警報に切り替えられ町民はびっくりした。誰か屋外にいた人がいて、米軍機は十数機だと叫んだが、二群に別れ大倉岳上空に現れ一群は中里方面に飛んで行き後の一群は金木町を目標に飛んでくるかに感じ

た。数機のうち二機は五所川原方面に飛んで行ったと言う。残りの数機は底空で金木町を目標して爆弾の投下と機銃掃射を一齐に開始した。

爆弾の破裂する大爆発の音と耳も遠くなる様な機銃掃射の音に人々の顔は蒼白でふるえておったと言う。空爆の時間は数十分と思われるが長い時間帯と思われたでしょう。無防備の田舎町金木まで空襲にくるとは誰も夢にも思わなかったと言う。女や子供の恐怖心はなおさらと思う。

米軍機が去りホッしたと思つたら、朝日町（駅前）付近が爆撃を受け死傷者が出たと言う。又、爆弾を投下された家から火事が発生し隣家にも火は燃え移り数軒が全焼、昭和二十年は雨も降らず火は燃え移り水不足の為に消火が用意でなく火は燃える一方だったと言う。

その間に、又、空襲警報が鳴ったと言うが五所川原方面に飛んで行った二機の爆撃機は、又、金木町を目標して飛んで来た。物凄い爆音で金木町を一周したと思つたら、今度は田圃の田の草（除草）取りの農民に機銃掃射をしたが農民は堰の中に入って隠れておったので死傷者は出なかったと言うが、嘉瀬村の中范の田圃にも爆弾一発が投下され大きな穴があいたと言う（土岐惣之助氏談）。

空襲警報は数十分で解除されたが、火災は激しく燃える一方で爆弾投下と機銃弾により即死する人、又、重傷を負われた人々は無惨その物であり、又、火災は勢い激しく熱気と煙で数十米離れても息を吸うのが苦しく近寄れなかったと言う。

金木町田圃の田中嘉工門氏（八七才）を尋ねて空爆についてお話を聞いたら、ご夫妻二人で色々知らせてくれた（ちなみ